

小規模中学校におけるインクルーシブ教育

高岸 愛娘¹⁾, 松本 莉子¹⁾, 青木 美和¹⁾, 小松 浩¹⁾, 是永 かな子²⁾

1) 高知市立鏡中学校

2) 高知大学大学院総合自然科学研究科教職実践高度化専攻・高知ギルバーク発達神経精神医学センター

Inclusive Education in Small Junior High Schools.

TAKAGISHI Aiko¹⁾, MATSUMOTO Riko¹⁾, AOKI Miwa¹⁾, KOMATSU Hiroshi¹⁾, KORENAGA Kanako²⁾

1) Kagami Junior High School in Kochi City

2) Kochi University Graduate School of Integrated Arts and Sciences,
Professional Schools for Teacher Education, Kochi Gillberg Neuropsychiatry Centre

要 約

本稿では小規模中学校におけるインクルーシブ教育を実践してきた鏡中学校の取り組みの内、2022年度に注目して成果と課題について示した。研究の方法は研究テーマに基づく、計画・提案、実践、検証、改善の一連の取り組みを全校で行う実践研究である。成果は以下である。第一に、生徒を伸ばすために教員が何ができるかという視点で実践研究に取り組み続けたこと。第二に、鏡中学校としてのインクルーシブ教育とは何かを考え続けたこと。第三に、小規模校におけるインクルーシブな「学校体制」づくりを目指したこと、である。今後に向けての課題は、生徒の成長をつなげていくための小中連絡会の提案や情緒障害特別支援学級の生徒のみならず知的障害特別支援学級の生徒も包括される授業のいっそうの追求である。

キーワード：小規模 中学校 インクルーシブ教育

1. はじめに

高知市立鏡中学校は「小規模校教育」の2022年度高知市研究協力校である。「学習への意欲を持ち、心身ともに健康でたくましく生きる生徒の育成～インクルーシブ教育を基盤とした思考力・判断力・表現力の育成～」の研究テーマのもと「小規模中学校におけるインクルーシブ教育」を実践してきた。本稿では主に2022年度の取り組みに注目して、成果と課題について示したい。

2. 方法

研究の方法は研究協力校としての研究テーマに基づく、計画・提案、実践、検証、改善の一連の取り組みを全校で行う実践研究である。研究部を中心に研究内容を計画・提案し、全校で実践を行い、アンケートなどで検証した。そ

の上で次の改善点を具体化した。一連の検討は研究部と管理職、大学教員を中心に行い、実践は知的障害特別学級と情緒障害特別学級を含めて全学級、全教職員でとりくんだ。学校規模は生徒数28名、教職員数14名である。個人情報保護等への配慮については学校の管理職に書面にて研究内容を提示し、承諾を得た。個人の情報は特定されないように内容を損なわない範囲で調整して提示している。

3. 結果

3. 1. 生徒の実態

鏡中学校の生徒は、非常に素直で真面目で、家庭学習をはじめ地道に努力を重ねることができる。また、授業や学校行事、部活動など何事にも一生懸命取り組んでいる。その一方で、様々な課題もある。

1つ目に、自分に自信がもてず自分の良さを認めること

ができていない、承認欲求が強いなど自己肯定感が低いこと、である。2つ目に、幼少期から同じ集団で育ってきたことでお互いに分かりあえている部分もある反面、保幼小中と固定化された集団だからこそ発言力のある生徒が中心になってしまう、コミュニケーション不足としての対人関係の課題、である。3つ目に、自ら考え行動することが少なく、周囲に頼りすぎる面や自分の意見を上手く伝えることができないなど積極性に欠けること、である。

3. 2. 研究主題の設定

そのような現状をふまえ、誰にとっても学校生活が安心して楽しい場所になってほしいという願いから、すべての生徒が尊重し合い、認め合い、支え合える集団を目指した。よって研究主題を「学習への意欲を持ち、心身ともに健康でたくましく生きる生徒の育成～インクルーシブ教育を基盤とした思考力・判断力・表現力の育成～」とした。そのために「インクルーシブ教育」の視点から、2021年度以降、年に数回、大学教員を招聘し、一人ひとりの生徒の見取りをもとに、生徒それぞれにあった必要な教員の対応や工夫等を学んできた。

結果として、自己有用感や社会的適応感等の数値に向上がみられ、一人ひとりが責任をもって笑顔で何事も取り組める様子が見られ始めている。

2022年度は、「インクルーシブ教育」について更に研究を深め、2021年度からの「学力の二極化」という大きな課題にも取り組むため上記のテーマを設定した。

そして、授業を中心とした「学び合う集団づくり」と日常を中心とした「高め合う集団づくり」の2つを大切にしてきた。

3. 3. 学び合う集団づくり

まず学び合う集団づくりを目的とした具体的な取り組みについて、つまり教科経営における「個別最適な学び」の充実を図る環境づくりについて、である。

1つ目は、タブレットを活用した授業づくりである。2021年度から導入されたタブレットを活用した授業も日常になりつつある。また、2022年度は、保護者の協力のもと家庭への持ち帰りをを行い、課題を家庭で仕上げたり、MEET でつないでオンライン学活にも挑戦したりした。タブレット導入による調べ学習では、「個別最適な学び」のみならず、個で完結させないためにも必ずペアやグループ活動を入れることによって「協働的な学び」も大切にしている。そのためにも協働の机の中央を共有すること、邪魔になるものを置かない、などを明示した。



写真1 協働的な学び

2つ目は、授業づくりのスタイルにおける全員共通事項である。

2022年度4月当初、学校全体で以下の内容を確認した。まず、全教科において、「めあて」と「まとめ」や「振り返り」の整合性を図る授業展開、そして生徒には、課題解決のための方法や手順を考えさせ説明させる場面の設定として、個、グループ、全体で考え説明させる活動を多く取り入れること、である。このためには教員がつけたい力(単元のゴールイメージ)を意識すること、課題解決のための見通しをもたせる場面設定を行うことが重要であり、生徒同士で思考させる場面と時間を設定した。ただし、まとめは教員が行うことにより、各時間の学びの保障を行った。結果として、一人ひとり表現は違うが、自分の言葉で説明することで、他の仲間に良い影響を及ぼす様子が見られるなど、効果的であった。

その他に、①小学校の既習事項を意識的にとり入れること、②個々の生徒の課題を想定した問いかけ、③生徒の発言を取り上げ、生徒同士をつなげること、④考えさせるとき、聞くときには、声のトーンを変えたり、一人ひとりに応じて寄り添う机間指導を意識的に行ったりすることとした。

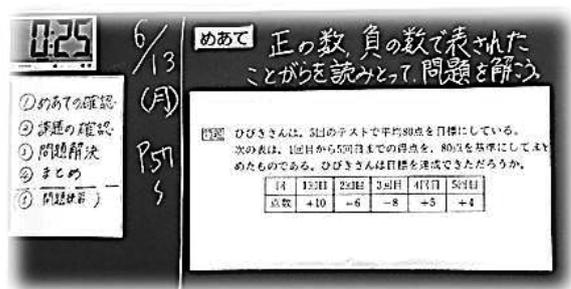


写真2 授業展開を意識した板書

そのためにも、単元計画の見直しやテスト内容の工夫はもちろん、課題の早期発見と弱点の克服指導としての小テストを実施し始めた。

資料1 単元小テスト

単元小テスト 国語 算数 理科 社会 英語

1 式の計算 7月1日 正答数 10

1 多項式 $3x^2 - 5x - 1$ について、次の問いに答えなさい。
 (1) 項をすべて答えなさい。 (1) $3x^2, -5x, -1$ (4)
 (2) 何次式ですか。 (2) 2次式 (4)

2 次の計算をしなさい。
 (1) $3x - 1$ から $2x - 4$ を引く $3x - 1 - (2x - 4) = x + 3$ (4)
 (2) $2x^2 + 3x - 1$ から $x^2 - 1$ を引く $2x^2 + 3x - 1 - (x^2 - 1) = x^2 + 3x$ (4)
 (3) $4x^2 - 3x + 2$ から $2x^2 - 5x + 1$ を引く $4x^2 - 3x + 2 - (2x^2 - 5x + 1) = 2x^2 + 2x + 1$ (4)

3 $x = 2$ のとき、 $3x^2 + 5x - 1$ の値を求めなさい。
 $3 \times 2^2 + 5 \times 2 - 1 = 12 + 10 - 1 = 21$ (4)

4 次の等式 (1) の中央の空欄に、適切な数を入れなさい。
 (1) $4x + 3 = 12$ (1) 9 (4)
 (2) $5 - \frac{1}{2}x = 3$ (2) 2 (4)

5 与えられた自然数の十の位を a 、一の位を b とするとき、 $10a + b$ の自然数は $10a + b$ と表される。また、 $10b + a$ の自然数は $10b + a$ と表される。したがって、 $10a + b$ と $10b + a$ の和は $10a + b + 10b + a = 11a + 11b = 11(a + b)$ と表される。よって、 $10a + b$ と $10b + a$ の和は 11 の倍数である。 (4)

6 連続する3つの自然数の和が3の倍数になることと、その3つの自然数の積が3の倍数になることとを下のように説明しよう。下のア、イに当てはまる式をそれぞれ書き入れ、説明を完成させなさい。
 連続する3つの自然数のうち、最も小さい数を n とする。連続する3つの自然数は $n, n+1, n+2$ と表される。したがって、それらの和は $n + (n+1) + (n+2) = 3n + 3 = 3(n+1)$ と表される。よって、 3 の倍数である。 (4)
 連続する3つの自然数の積は $n(n+1)(n+2)$ と表される。よって、 3 の倍数である。 (4)

「振り返りの仕方」では、生徒同士の違いを前提とした学びという「インクルーシブ教育」の視点も兼ねて、全校共通で以下の内容で行った。

資料2 振り返りシート

家庭分野(技術・家庭) 振り返りシート 年 番 ()

仲間と学び合いの中でどのような気づきがありましたか? YES/NO

例 (YES) 私は、袋のスナップツグが上手にできなかったが、〇〇さんから針の刺し方・抜き方のコツを教えてもらい、針を刺す位置をそろえて正確に縫うことで丈夫できれいに縫うことがわかった。
 (NO) 布を上手にもつことができず、針を布にうまく刺すことができなかった。玉留めも習ったけどきれいできない。

| | | |
|-----|----------------------------|------|
| めあて | YES/NOのどちらかに○をし、理由を書きましょう。 | 先生より |
| 月 | YES / NO | |
| 日 | | |

まず共通振り返りとして、「仲間と学び合いの中で気づきがありましたか?」について、YES/NO で回答を求め、「その理由は」というように、各教科例を提示して振り返りを行っている。

資料3 国語振り返り例

最初は、祖母は「えびフライ」を知っているものだと思っていました。だけど、「……うめんせ」という所で、「……」が入っていることによって祖母は知らないものだということがわかりました。〇〇さんが、主人公がえびフライがどうしても気になる様子を「無意識」と表現しているのが、その通りだと思ったし、面白いと思いました。

人によって「段々〇〇」が「どんどん〇〇」など表現の仕方が違って、「その表現いいな」と友達との意見交換の時に思いました。つづやきに注目して考えると、主人公は田舎に住んでいて初めて知る食べ物や物事にとても興味があるのではないかなと思いました。初読の感想では「えびフライ」にどういう意味があるのかわからなかったけど、今日注目して読んでみると、「すこ気になっているから」ということが今日の学習を通してわかりました。

登場人物の心情を、時間が経過するにつれて表現の仕方を少しずつ少しずつ変化させて表している描写がいいなと思いました。「えびフライ」を「無意識につづやくほど、興味を持っている」という〇〇さんと〇〇さんの意見を聞いて、とても納得できました。こんな表現の仕方があるんだなと思いました。

主人公の言動から意味を考えるときに、主人公が質問した後の動作や答える速さによって、「えびフライのことを知らない」と読み取ることでよかったので、これからは文の細かいところまで読み解いて考えていきたい。二個目の問題は少し難しく、〇〇さんの感じたことを聞いて、「何回『つづやくても、つづやくても』という表現がいいなと思ったし、わかりやすかった。

上は、2年生国語のふりかえりである。友だちとの学びの中での発見を、しっかり表現している。書くことが苦手な生徒でも、以下のような例を提示することで、スムーズに取り組めている。

YES の場合の例：自分は「リズムメロディーの作り方」が分からなかったが、〇〇さんに教えてもらって、リズムづくりの際には、拍数を考えてまずは小節を埋めていけばいいことが分かった。音符の旗の数が多くなるほど、その音符がもつ拍の長さが半分に短くなることもわかった。

NO の場合の例：メロディというものが何なのか良くわからなかった。メロディって音階があるんじゃないの?

その他として授業では、一人ひとりに細やかな声かけ心がけている。

例えば、「具体的にいいところを伝える」として、ここのこういうところがよかったね、など、いいとおもった「瞬間」に伝えると生徒の表情はパッと明るくなる。他にも生徒の言葉を使ってよい評価を伝えることも効果的であった。

生徒自身が活動することへの指導は、「授業における主役は生徒」という考えから、短く端的に行うこと、「生徒の思考」を念頭に教員は、生徒同士をつなぎ役になることを意識した。その結果、生徒同士どんどんかかわり合うことができることもわかった。



写真3 生徒同士のかかわる場面

結果的に学習内容の定着を図るための指導の工夫や基礎的学習(復習中心)と発展的学習の課題や教え合い学習の設定によって、個に応じた課題と仲間との学びを同時追求したのである。

3. 4. 教員研修内容の工夫や組織的な取り組み

次に教員研修内容の工夫や組織的な取り組みについて以下に示す。

年度当初に1年後のイメージを共有する研修を行った。

その際、1年は「きちんと意見を言えるようになること」、2年は「今のままでのびのびとそして特別支援学級の友達を大切にできる集団」、3年は「貪欲に自律した集団に」を目指すこととした。

そして、一人2回以上の研究授業を行った。授業後の振り返りでは、グループウェアでのアンケートを実施し、アンケート結果をもとに、よかったことや改善点を話し合い次の授業につなげた。効果的な ICT の活用を生徒のみならず教員も意識したのである。



写真4 一人2回以上の研究授業

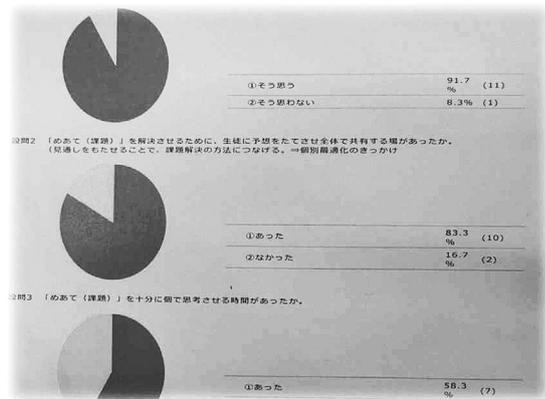


写真5 グループウェアでのアンケート



写真6 アンケート結果に基づく話し合い

みんなで改善を進めるために教職員も、生徒と同じように、互いに協力しあい、距離を縮める。振り返りも一人ひとり行った。

3. 5. 教科間連携

教科間連携としてAは理数教科、Bは技能教科・特別支援、Cは国社英教科3つのグループに分かれて、2週間に一回集まる定期的なグループ会を実施した。

統一した分析カルテ様式に教科から見たポイントとなる生徒の様子を記入し、グループ内でPDCAを行う。

資料4 教科間連携の分析カルテ

教科間連携 教科グループ A組(理) B組(英) C組(国)

「インクルーシブ教育を推進に向けた授業づくりと個々の支援」

| 名前 | 課題 | 目標 | 達成状況 | 振り返り | 今後の課題 | 支援策 | 効果 | 評価 |
|------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 山本 大 | 読解力 | 読解力向上 |
| 山本 大 | 読解力 | 読解力向上 |
| 山本 大 | 読解力 | 読解力向上 |
| 山本 大 | 読解力 | 読解力向上 |
| 山本 大 | 読解力 | 読解力向上 |

このカルテは、生徒の頑張れる力・課題・目指す力・手立てが記入されるようになってきている。個別シートとしての「成長シート」の作成と一人ひとりに合った学習方法の研究につなげたのである。

このカルテをもとに学期末に全体で共有し、進捗状況を確認するだけでなく、生徒への効果的な支援方法や成長を確認している。

支援方法の検討の際には特別支援教育の方法論も援用した。例えば、低学力が気になる場合は視覚、聴覚、運動感覚どの学び方が有効かを見極めるLD支援を活用したり、不注意が気になる場合は本人が動く、しゃべることを多用するADHD支援を行ったり、見通しが持てないと不安になる場合は、聴覚指示は短く視覚的にも提示するASD支援を活用するなどした。

3. 6. その他の学び

その他にも目に見えない学力すなわち、数値にあらわれにくい学力の土台作りにも力を入れている。

認知機能「コグトレ」は、学習の基礎的土台となる。「コグトレ」とは認知〇〇トレーニングの略称で、本校では、現在週1回、認知機能トレーニング（覚える・見つける・写す・数える・想像する）を行っている。また、体育では、認知作業トレーニングとしての身体的不器用さの改善を取り入れている。2022年6月にはコグトレの第一人者であり、「ケーキのきれいな非行少年たち」や「どうしても頑張れない人たち」等の著者宮口氏の1番弟子の高村希帆氏を招いて、幼小中合同学習会を開催した。

家庭学習では、定着を図ることを目指して、全体で教科の宿題日を決め、量については教科担任や学級担任で調整して行っている。

また、生活日誌では、自己有用感の育成のために「寄り添い認め応援する」ことを念頭に、毎日の生徒の日記コメントを行っている。

資料5 生徒の日記へのコメント

| 時間 | 単元・領域 | 教科 | 内容 | 時間 | 時間 | 単元・領域 | 教科 | 内容 | 時間 |
|----|-------|----|-----|-----|----|-------|----|-----|-----|
| 6 | 1 | 国語 | ... | ... | 6 | 1 | 国語 | ... | ... |
| 7 | 2 | 算数 | ... | ... | 7 | 2 | 算数 | ... | ... |
| 8 | 3 | 理科 | ... | ... | 8 | 3 | 理科 | ... | ... |
| 9 | 4 | 社会 | ... | ... | 9 | 4 | 社会 | ... | ... |
| 10 | 5 | 英語 | ... | ... | 10 | 5 | 英語 | ... | ... |
| 11 | 6 | 体育 | ... | ... | 11 | 6 | 体育 | ... | ... |

今日の生活日誌へのコメント：...

っている。分からないときは、同級生や教員に分からないことを「わからない」と素直に言って教えてもらい、更なる学力アップを目指す喜びの場をめざしている。下級生は、上級生への憧れと分からないところを教えてもらえる喜び、学習する姿勢を学べる場になっている。

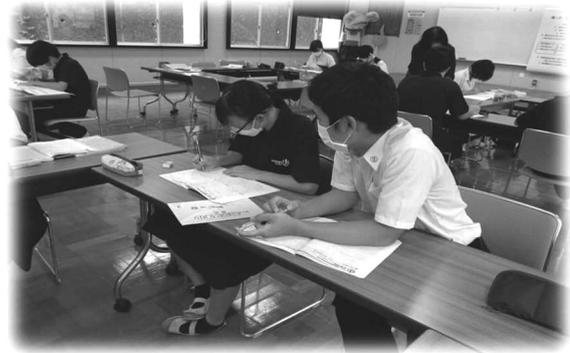


写真7 縦割り座席の放課後学習

また自学の仕方を教えてくれるのみならず、上級生は自学ノートも快く貸してくれる。

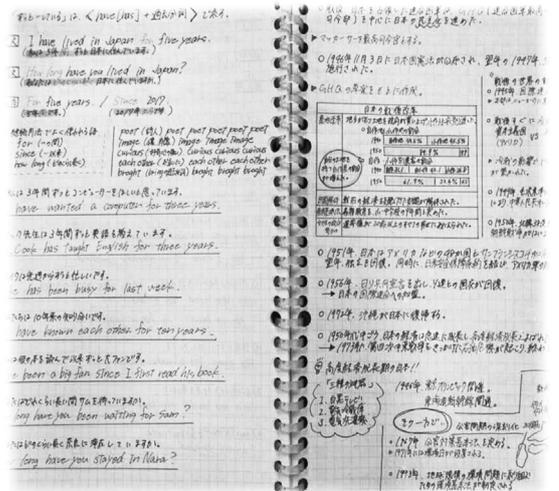


写真8 上級生の自学ノート

最後に加力学習である。通常の一斉加力における工夫としても個別に同じプリント課題を解いて、教員が○をつけ、解説する「塾形式」、グループで同じプリント課題を解いて、○つけする「自習室形式」、それぞれが個々の課題に取り組む「自学方式」などの試行錯誤を行った。

その上で「鏡っ子やる気」応援週間として15時45分から16時45分まで自主参加型で、縦割り班で学習している。上級生は、下級生に教えてあげたい、そのためには、自分がしっかりと頑張る理解していかなければと頑張

3. 7. 「高め合う集団」づくり

本校では、学力面での学び合う集団づくりと合わせて、日々の学校生活でも高め合う集団づくりを目指している。そのために以下のような取り組みを行っている。第一に全教職員の共通認識形成として、年度始め・学期終わり・職員会での生徒理解の時間の設定。第二に、特別活動や他学年交流の充実。第三に、各種アンケートによる分析・変容の把握。第四に、創造し学び合える総合的な学習の時間や学校行事、である。目標は「誰にとっても学校が安心して居心地のよい場所」となること、である。

第一の全教職員の共通認識については、小規模校の特色を生かし、生徒一人ひとりをよく理解できるように努めている。年度始めには異動した教職員含め、生徒理解について写真付き PPT 資料で全体共有をはかった。この際、共有した内容は家庭状況、学習状況、健康課題はもちろんのこと、よさや強み、今後伸ばしていきたい点、2021 年度の大学教員による見立てなどであった。定期の職員会でも始めにクラスの様子や気になる生徒など情報共有の時間をとっている。また、学期終わりには、年度始めに共有した内容からどのような変化があったか、生徒一人ひとりの変容を知る時間をとった。このことによって、担任だけが、注意を要する生徒だけを、ではなく「全教職員」で「全校生徒」を支えるという意識をもって、働きかけている。

第二に、全校で取り組む特別活動としてのエンカウンターである。2022 年度から、小学校第 1 学年から中学校第 3 学年までの連続性を考えて児童・生徒の人間関係を育むための高知市「あったかプログラム」を活用した計画的・組織的な実践を行っている。

資料 6 特別活動としてのエンカウンター

特別活動取り組み計画

①全体

| 学期 | 月 | 活動名 | めあて・活動内容 |
|------------|----|---------------------|--|
| 1 | 5 | 言葉の写真 (合同運動会) | 運動会を通じて仲間のよさを見つけるとともに、自分のよさや頑張りに気づく。 |
| 2 | 10 | 君はどこかでヒーロー (文化祭) | クラスでさまざまな役割を担って人のために活躍したり、貢献したりした仲間を互いに認め合う。 |
| 3 | 1 | 感謝の花束 (マラソン大会) | 自分自身の成長を確認するとともに、周囲の人への感謝の心を持つ。 |
| 長期 休み明け | | サイコロトーク | 自分の好きなことや考えていることを話し合うことで、お互いを理解するとともに、安心して話せる雰囲気や親密な関係を気づいていく。 |

②学級

| 月 | 活動名 | めあて・活動内容 | P |
|---|----------------------|---------------------------------------|-----|
| 4 | 学級組織づくり (すごろくトーク) | クラスの仲間のいろいろな面を知ること、人間関係を築く。 | 34 |
| 5 | 言葉の写真 (合同運動会) | 運動会を通じて仲間のよさを見つけるとともに、自分のよさや頑張りに気づく。 | 58 |
| 6 | エンジェルハート | 自分を応援してくれる人の存在を感じたり、仲間を支えたりするよさを体験する。 | 122 |

資料 6 は 2022 年度始めに提案した特別活動取り組み計画の一部である。全校では、行事終わりの振り返りとして、クラスメイトだけではなく、他学年の良さを発見できるようにしている。また、学級では他人のよいところを見つけたり、今まで知らなかった新たな一面を知ることができたりするようなプログラムを取り入れている。このような活動を通して、自他のよいところを見つけ、対人関係スキルを高めていく。また、最初に述べた本校生徒の課題を受け、自己肯定感の育成、コミュニケーション能力を高めることを目指している。

具体例として 5 月の運動会後には、言葉の写真と題して、

ありがとうメッセージを書いた。紅組・白組同士のメンバーにメッセージを書き、学年を超えた取り組みとなった。先輩から後輩へ、クラスメイトへ、特別支援学級の生徒から、と様々な視点での感謝の気持ちを受け取ることができた。

言葉の写真(運動会終わりのメッセージ)

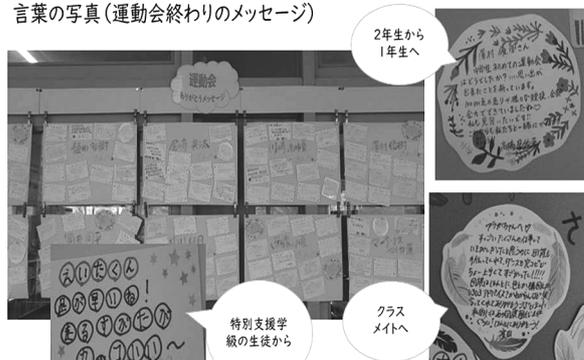


写真 9 生徒同士のメッセージ交換

学級では「エンジェルハート」と題して、自分を応援してくれる人の存在を感じたり、友達を支えたりするよさを体験できるような取り組みを行った。活動の流れは、くじを引いて、応援するクラスメイトを決めること、次に 1 週間、その人に分からないようさりげなく応援すること、最後に、終了後、応援していた人にあてたメッセージを書くという内容である。このように 1 週間誰かを応援する、誰かに応援してもらうという体験を通して、いつも見てくれる存在がいることの温かさや優しさを感じられるようにした。

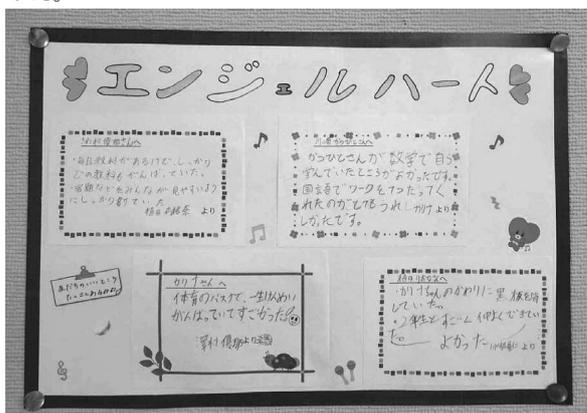


写真 10 エンジェルハート

教室掲示により、褒め言葉の見える化として内容を共有した。

年度や学期始めには、各教室でさいころトークを行った。クラスメイトの新たな一面を知ると同時に、安心して話せる雰囲気や親密な関係づくりへの最初の一步としてつながることができたと評価した。

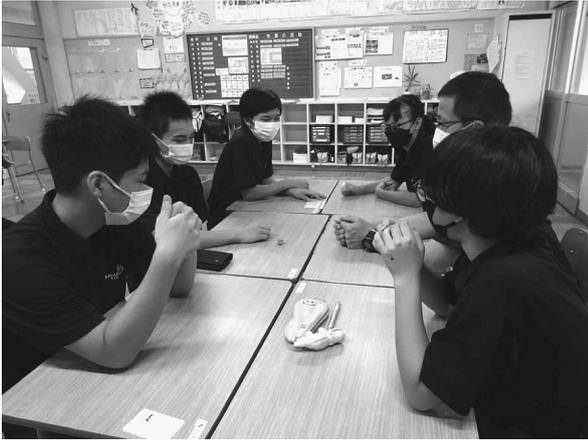


写真11 さいころトークング

教職員研修では、特活プログラム体験を取り入れた。コグトレでウォーミングアップ、協力型の新聞タワー作成、アドジャントークングでお互いを知る活動を通して、生徒の気持ちになって考えることはもとより、新たな同僚の一面を知ったり、班別で協力し合うことで、教職員間での関係を深めることにもつながったと考える。



写真12 協力型の新聞タワー作成研修

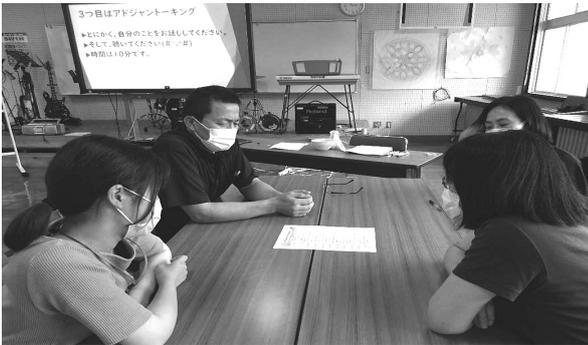


写真13 アドジャントークング

次に、他学年交流の充実についてである。地域の方にもご協力いただいて行う梅ジャム作りやLGBTQ学習、平和学習など、総合的な学習の時間、縦割り掃除、上級生から

下級生への教え合いの場となる放課後加力学習、生徒会主体で行う全校レクリエーション大会など、本校では様々な他学年交流の場がある。社会的に学力保障や教員の働き方改革が求められる傾向がみられるが、行事は生徒の心の成長を促し、「人間力」をつけるという大きな利点がある。



写真14 全校レクリエーション大会

2022年度からは縦割り掃除を導入し、各班ごとに担当場所の掃除を行っている。



写真15 縦割り掃除

場所の割り振りや、毎回終了後に行う班会での進行は、3年生に任せており、リーダーシップ力の向上をはかっている。また、全校生徒28名を4班に分けて縦割り掃除を行うなど、少ない人数で掃除することや、班会で感想を発表することで、一人ひとりの意識の変化を目指して取り組んでいる。

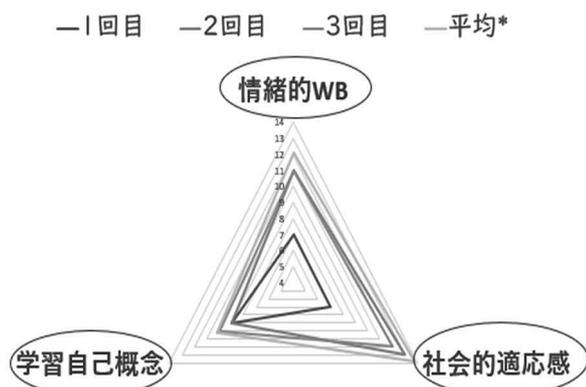
3. 8. 各種アンケートによる分析・変容の把握

生徒の内面と集団の現状を把握するために、様々なアンケートを行い、その分析や変容の把握を行っている。落ち着いた環境・時期のアンケート実施による「早期発見」、気になる生徒との個別面談による「早期対応」、職員会でアンケート・面談の結果を周知することによる教職員間での「共通理解・情報共有」の3点を重視している。QUアンケートや学校生活アンケート、そしてPIQアンケートを

取り入れている。PIQ(Perceptions of Inclusion Questionnaire)はインクルーシブ教育における生徒の情緒的ウェルビーイング (emotional well-being)、社会的適応感 (social inclusion)、学習自己概念 (academic self-concept) を測るために開発された、信頼性の高い尺度である (ホームページ参照: <https://piqinfo.ch/>)。

これはPIQによる、ある生徒の変化である。

資料7 PIQ の変化



1回目は2021年9月6日、2回目は2022年4月12日、3回目は2022年6月20日に実施した。生徒が学校にいて感じる幸福感を測る情緒的ウェルビーイング(WB)、自分の学習能力についてどう捉えているかを測る学習自己概念、学校での繋がり・友人関係を測る社会的適応感の3点の尺度を見ることができる。1回目は各項目10点を下回っており、学校が安心できる場とはいえない状況だったが、2・3回目では三角形が大きくなり、特に情緒的WB、社会的適応感の高まりがみられる。このように全校生徒28名分のPIQグラフを打ち出し、ひとり一人の生徒の変容が視覚的に分かるようにしている。

3. 9. 実践の成果と課題

鏡中学校のこれまでの成果と課題については以下である。学力の2極化についてはまだまだ課題であるが、互いに支え・教え合うさりげない様子や自他ともに認めあい、生徒が自ら進んで活動する様子が見られてきた。また、全体で学校を支えるという教職員の意識も生まれ、チーム学校として変化しつつある。今後の取り組みとしては、一人ひとりに応じたきめ細かな指導を充実させること。主体的な学びを保障して、生徒が主役となる授業づくりを行うこと。効果的な各調査分析とPDCAサイクルの実践を継続すること。以上によって、今見えてきた成果を大切にしながら、今後も生徒の未来づくりのために教職員一同頑張りたいと考えている。

4. 考察

本稿では「小規模中学校におけるインクルーシブ教育」を実践してきた鏡中学校の取り組みの内、2022年度に注目して、成果と課題について示した。研究の方法は研究協力校としての研究テーマに基づく、計画・提案、実践、検証、改善の一連の取り組みを全校で行う実践研究である。本研究における成果は以下である。

第一に、「生徒を伸ばすために教員が何ができるか」という視点で実践研究に取り組み続けたことである。そのために生徒に身に着けてほしい姿を教員が体現すること、教員が生徒のモデルになること、を意識した。具体的には、挨拶、時間を守る、整理整頓、メリハリのある生活、お互い助け合うこと、人の話を聞くときの態度や姿勢など、教員自身が率先して意識した。

第三者からの指導方法の提案についても、「○実施して有効」、「△実施したが有効ではなかった」、「×実施しなかった」の評価を行い、○の支援は継続、△の支援を中心に改善の協議を行った。全員の生徒に対する支援方法を文章化した。

そして「教員は生徒を集団として成長させているか」を意識していた。それは学校全体の環境整備のみならず、授業中の学習環境整備の確認、班活動の際の机の整備などを明示した。生徒同士の協働を増やすために、終学活を自分たちで運営できるようにして、教員は集団に対するフィードバックを行う役割を担った。

第二に、「鏡中学校としてのインクルーシブ教育とは何か」を考え続けたことである。少人数であるからこそ、特別支援教育を含めた個々の違いを前提に、どのような集団をつくるかを生徒とともに考えた。

そのためには、お互いのかかわりをあきらめない主体的な「学び合い」、生徒が自ら動いて成長できる「環境」設定を行った。それらは例えば考えさせる授業、自分たちで考える場面の設定、探究活動の保障によって思考とかかわりをあきらめない力を高め、その上で生徒に少しずつ任せる場面を増やした。生徒をつなげて生徒同士で「できた」「わかった」「楽しかった」を増やすように心がけた。

そしてお互いの良いところを見つける「尊敬し合い」を意識した。かかわり合う力に関連して、生徒同士でいいところを見つけ合うことで、生徒の笑顔を増やすこと、他者評価活動などの取り組みを行うことで、生徒間で他者理解、自己理解、そして他者の視点を通じた新たな自分の長所発見という、より高次の自己理解を目指した。

またいろんな人を巻き込む集団としての「高め合い」として、切り替える力を高めて、応援し合う関係を促した。

第三に、「小規模校におけるインクルーシブな学校体制づくり」を目指したことである。全員が有機的な「チーム」としてつながること、学年団、教科、校務分掌、様々な関連付けを念頭に組織体制づくりを行っていった。

そのために「学年団」としてのチームでは、PIQ アンケートを実施して、年度当初に1年後のイメージを共有する研修を行った。

そして「教科会」としてのチームは、「教員からの支援」として生徒に何ができるかを具体化した。具体的には、授業の工夫として、生徒が教員の授業を評価するアンケートを実施した。それらは①ねらいを書く、②授業中に一人一言は発言させる、④ペア・グループ学習を一度は入れる、④教員は授業中一人一回はかかわる等の柱で構成された。

また個に応じた課題・目標設定にも取り組んだ。知的障害特別支援学級の生徒や情緒障害特別支援学級の生徒のインクルージョンをいかに具体化するのかを想定しつつ、授業中の発問、個別支援と集団支援のバランス、一斉加力における工夫などの試行錯誤を行った。

他にも、すべての生徒を対象とした個別指導計画の観点での成長保障、生徒の強い力、頑張っている所、支援方法を具体的に協議することで、①特別ではない特別支援教育、②全ての児童生徒を対象とした問題行動の予防や、生徒の個性・自尊感情・社会的スキルの伸長に力点を置いた生徒指導としての「開発的生徒指導」を具体化した。

特別ではない特別支援教育としては障害の有無にかかわらず、低学力傾向の生徒や人の気持ちがわかりづらい生徒の困難性の理解と対応方法の具体化、そのためにもやらないのではなく「できない」と考え、さりげなく支援を入れたり、生徒につながったりした。

最後に、今後に向けての課題は以下である。

生徒の成長をどのようにつなげていくかという観点からの小中連絡会、そのための書式の提案、複式学級が前提になったとしても単学級としての活動を保障するための工夫があげられる。また情緒障害特別支援学級の生徒のみならず知的障害特別支援学級の生徒も包括される授業のいっそうの追求も重要である。

総合的に、障害者権利条約を念頭に「分離」を前提とした特殊教育から、一般的な教育制度から排除されない「インクルーシブ教育システム」の構築のために、日本の学校教育においていかに「全ての者の学校」を構築するか、例えば同一教材の異課題設定などは今後も引き続き検討すべき課題である。

